

Maugham の美の探求 「The Moon and Sixpence」論

A Study of “The Moon and Sixpence”
in Maugham’s quest for beauty

田 中 正 志

(一)

Maugham の作品、特に小説において、作品の内容と評価は必ずしも一致せず、この「The Moon and Sixpence」は *Of Human Bondage* や *Cakes and Ale* にみられるような人間の感情を深め、人間探求の徹底さに欠けるが、批評家たちの好評を得て、Maugham の代表作の一つとして評価されている。

The Moon and Sixpence は1919年に *Liza of Lambeth* (1897) , *Of Human Bondage* (1915) について、三番目の主要な長編小説である。

この小説の題名は主人公 Charles Strickland が探求しつづける美の極致を「月」とし、俗人の理想、即ち、名誉や立身出世や経済的満足を人生の最高のものと考えたことを「六ペンス」とし、「月と六ペンス」との比は崇高なるものと俗っぽいものとの対比を象徴している。

Maugham は *Of Human Bondage* に寄せられた London Times の書評「主人公 Philip Cary は多くの若者と同じく、月にあこがれるあまり、足もとの六ペンスに気づかなかった」から取ったといわれている。

(二)

この作品は1930年に発表された *Cakes and Ale* と同様に一人称小説で「わたし」という語り手、即ち Maugham が登場し、客観的に語るという手法で物語は展開する。

語り手「わたし」が Charles Strickland に出会った時、「わたし」が23才で Strickland が40才であった。当時、彼はロンドンの株式取引所員で清楚で文学に興味をもつ妻と二人の子供と四人暮らしで、英国の中流階級の平和な家庭を営んでいた。若い作家、「わたし」はやはり作家である Miss Waterford のお茶の会に出席し、そこで Strickland 夫人に紹介され、その後、近所同志だということで午餐会に招待された。Strickland 夫人は実にやさしい、しっかりした中年の女性で若い作家である「わたし」はうらやましく思った。夏が終わって「わたし」が避暑地からロンドンに帰ると Strickland が妻子を捨ててパリにとび出していた。女と駆け落ちしたにちがいないと夫人は思い、「わたし」はパリに行つて夫を連れ戻すよう依頼を受け、パリに行くが、夫人の思いとは全くちがった真相に出合う。Strickland が家をとび出したのは絵を描きたいという一念で、ロンドンで夫人が思っているような女関係は全くなく、それ以上に「わたし」を啞然とさせたことは、家族に対する思いは全くなく、人が自分のことをどう思うがかわまないという自分の行動に全く罪の意識がないことであつた。

因襲的な物の考え方では Strickland を説得することはできず、あきらめてロンドンに帰り夫人にこのことを報告した。夫人は一生 Strickland を憎むと悪口をたたいた。その後、夫人はタイプの仕事で生計をたてることになる。

それから5年程して「わたし」はパリで暮らすことになった。以前からの知人であるオランダ人画家 Dirk Stroeve に再会。

彼は絵についての知識と鑑賞力は秀れているが、絵を描くという点では才能をもたない、しかし素人うけのする絵をかいて結構、金まわりはよく、無類のお人好で肥った小男であつたが妻の Blanche は物静かで魅力的な女性で彼女を熱愛していた。

Stroeve は偶然 Strickland を知っており、Strickland の才能を認め偉大な画家になると信じていた。Strickland の行きつけのカフェで「わたし」は彼と再会したが絵は売れず餓死寸前という状態であつたが自己中心的で今でも妻子に対して悪いという考えはなく、彼の絵をけなされても自分は幸福だという態度であつた。Stroeve の妻の Blanche は Strickland が好きではなかつた。

数ヵ月後、孤独な画家 Strickland をクリスマスに招こうと思って彼がいつもやってくるカフェに行ってみると Strickland のチェス相手のフランス画家から Strickland が病気だと聞いて彼のアパートを探して行ってみると40度の熱におかされ、さらに2日間、水しかのんでなかった。Stroeve は Strickland を自分の家に引きとって看病したいと言うと Strickland を嫌っている妻は反対する。

“Strickland is very ill. He may be dying. He is alone in a filthy attic, and there is not a soul to look after him. I want you to let me bring him here.”⁽¹⁾

(Strickland は重態なんだよ。死ぬかもしれない。汚らしい屋根部屋に一人いるんだが、世話するものもないんだ。それでねここへ連れてきてやろうと思うんだが、いいだろうな)

“I’m frightened of him. I don’t know why, but there’s something in him that terrifies me. He’ll do us some great harm. I know it. I feel it. If you bring him here it can only end badly.”⁽²⁾

(私、あの男が怖い。自分でもよくわからないわ。でもあの男、なぜか怖いよ。私たちになにか怖ろしい目にあうような気がするの。私にはわかるわ。予感がするの。連れてきてごらんなさい、きっとよくないことが起こるに決ってるわ。)

“Haven’t you been in bitter distress once when a helping hand was held out to you? you know how much it means. Wouldn’t you like to do someone a good turn when you have the chance?”⁽³⁾

(お前だって、一度はずいぶん苦しい目にあったわけじゃないか。そこへ折よく、救いの手が伸びたというわけだが、それがどんなにありがたいものか、お前にはわかっているはずだ。それが、今度はお前のほうでしてやれる番なのだ。なんとか人のためになってやりたいと思わないかい)

ついに妻の説得に成功した Stroeve は Strickland を自分の家で手厚く看護した。ところがお人好しの Stroeve に感謝の気持ちをいやくどころか全く自己中心的にふるまう始末だった。

さらに悪いことに Blanche が予感していた事がまさに現実になり、彼女は Strickland といい仲になり Stroeve を見捨てる。お人好しの Stroeve は二人に自分のアトリエを与えて、自分が出てしまう。Blanche を熱愛していた Stroeve はいつか自分のところに戻ってくることを信じて待っていた。Strickland は Blanche との生活で本来、自己中心で他を思いやることない彼にとって彼女の独占欲に嫌気が増幅し、ついに家を出てしまった。Blanche は悲しみのあまり鬱酸を飲んで自殺をはかった。Stroeve は彼女を病院に運び、看病するが一週間後に帰らぬ人となった。Stroeve は自分を裏切った Blanche のために、事情が事情だけに面倒な手続きを経て柩を墓場まで運び埋葬した。

傷心の Stroeve は自分のアトリエに行き、そこに Blanche の裸体画を見つけ、心穏やかでないが、心打たれる芸術であることを発見する。

"I don't know what happened to me. I was just going to make a great hole in the picture, I had my arm all ready for the blow, when suddenly I seemed to see it."

"See what?"

"The picture. It was a work of art. I couldn't touch it. I was afraid."

Stroeve was silent again, and he stared at me with his mouth open and his round blue eyes starting out of his head.

"It was a great, a wonderful picture. I was seized with awe. I had nearly committed a dreadful crime. I moved a little to see it better, and my foot knocked against the scraper. I shuddered."⁽⁴⁾

「どういうことだったか、僕にはわからないのだ。たしかに僕は、その絵に大きな穴を開けてやるつもりだった。あわや振り下ろさんばかりになっていた。ところが、その時突然僕は、はじめて見たのだ」

「なにをだよ？」

「絵をさ。たしかに、こいつは芸術品だった。僕は手を下すことができなかった。怖くなったんだよ」

「たいした、すばらしい絵なんだ。僕はゾットした。すんでのことで、おそろしい罪惡を犯すところだった。もっとよく見ようと思って、二、三歩後ろへ退がったが、とたんに足が竈に躓いた。僕は慄然とした」

Strickland に自分の生活の基盤を破壊された Stroeve も彼の絵の前では屈服せざるをえなかった。Stroeve はその裸体の絵をもって、オランダの故郷に帰り絵を描くことを断念する。

その後、「わたし」は一度だけ Strickland に会い、彼の絵を三十枚ほど見る機会があった。初めはおかしな構成、単純な線、技巧の稚拙さが気になりすばらしい絵だとは思わなかったが表現を求めて苦しんでいる真の力といったものを感じないわけにはいかなかった。

むしろ、興奮を感じ、異常な興味をさえ唆られ、見る人の心をひどくイライラさせる作品で自分でも分析しきれない感動を与え、表現の解放を求めて、苦闘する魂を見た。

それ以来、「わたし」は Strickland に会うことはなかった。彼はパリからマルセイユにそれからタヒチへと放浪の旅に出て、タヒチで病死した。

「わたし」は彼が死亡して5年後にタヒチ島を訪れ、晩年のタヒチでの生活を彼と関りのあった人たちから聞いた。

Strickland がマルセイユから半年かかってタヒチに着いた時、心の故郷をこの島に感じて満足感にひたった。島のホテルの女主人 Johnson は Strickland の面倒をよくみてくれた人だが、彼女の紹介で、ホテルで働いていた17才の土人娘、Ata と結婚し、二人は Ata の家で生活することになった。

Ata の家はタヒチの奥地にある椰子林に囲まれたところで、Strickland の生涯で最も幸福な時であった。

but the place where Strickland lived had the beauty of the Garden of Eden. Ah, I wish I could make you see the enchantment of that spot, a corner hidden away from all the world, with the blue sky overhead and the rich, luxuriant trees. It was a feast of colour. And it was fragrant and cool. Words cannot describe that paradise. And here he lived, unmindful of the world and by the world forgotten. I suppose to European eyes it would have seemed astonishingly sordid. The house was dilapidated and none too clean. Three or four natives were lying on the verandah. You know how natives love to herd together. There was a young man lying full length, smoking a cigarette, and he wore nothing but a *pareo*.”⁽⁵⁾

(ところで Strickland の住んでたあの場所ときたら、エデンの楽園さながらの美しさなんだな。ああ、実際あの美しさは、君にも見せてあげたい。いっさいの外界からソッと切り放された一隅、仰げばあの青い大空だし、四方は咽せかえるような樹立の繁りだ。いわば色彩の饗宴というやつだな。冷たい風、かぐわしい香り、とても言葉などで形容できる楽園じゃない。そして彼はそこでいっさいの世界を忘れ、世界からも忘れられて生きていたのだ。なるほどヨーロッパ人の眼から見ればね、おそらくびっくりするほど不潔な住居だったかもしれぬ。家は崩れかかっているし、決して清潔だとはいえなかった。私が行った時も、土人が三、四人、ヴェランダに寝そべっていたが、あのすぐ寄り合いたがる土人たちの癖はもうご存じだろうと思う。若者が一人、長々と寝そべって煙草を吹かしていた。見れば身にはパレオを一枚着けているだけなのだ)

Strickland は Ata に全く満足しきっていた。子供の世話、料理をよくし、自殺した Blanche とちがって、彼をそっとしておき、自由奔放にさせてくれた。その結果、彼は美の理想をタヒチのすばらしい自然と土人女の健康な肉体の中

に見出し多く傑作を生んだが、生前は誰も正しく評価する者はいなかった。Strickland にとって、そんなことは問題ではなかった。

彼の目的は絵を売ることによって、金もうけすることではなく、ただ、自分の魂を追求することにあった。

最後に「わたし」の心を打ったのはタヒチ島の医者のお話であった。

トラヴァオまで女酋長の病気を診察に行き帰途、Ata からの使いの娘に会い、Strickland が具合が悪いので来てほしいという伝言をうけた。14キロの悪路を考えると少々苦痛であったがその娘が泣き出してしまうのでとうとう自分の義務として、娘に道案内をさせて行くことにした。彼らの住居に着いてみると Strickland は画を描いていたのだが顔全体が厚ぼったく脹れ上がって癩の典型的症状が現われていた。死の宣告にもかかわらず、自分の生命はどれ位なのか平然と医者にならず、隔離される代りに山奥に入る決意をする。

“You have had a long journey. It is fitting that the bearer of important tidings should be rewarded. Take this picture. It means nothing to you now, but it may be that one day you will be glad to have it.”⁽⁶⁾

(遠方をどうもありがとう。重大な音信を持って来てくれた人間には、十分の酬いをするのが礼儀だろう。君、この絵をもらってくれたまえ。今じゃまだ紙屑みたいなものだろう。だが、きっといつか喜んでもらえる日が来るだろうと思うんだ)

自分の才能を確信している Strickland の自信に満ちた言葉、人間の苦痛の中で最悪の癩という病気に対する不屈の精神に医者は凡人にないものを見て取った。

土人たちは感染を恐れて Strickland たち親子から去ってしまった。その後、医者は一人で Strickland を訪ねたがすでに声帯までやられ、壁に絵をかいているということでどうしてもあつてはくれなかった。それから2、3年経って、Strickland が危篤だという知らせを郵便車の馭者を通じて受

け、草ぼうぼうの道を踏みしめて行った。

時すでに遅く、彼は死んでいた。Ata は床の上に長くなってすすり泣いていた。

次の瞬間、壁を見た。

now he was seized by an overwhelming sensation as he stared at the painted walls. He knew nothing of pictures, but there was something about these that extraordinarily affected him. From floor to ceiling the walls were covered with a strange and elaborate composition. It was indescribably wonderful and mysterious. It took his breath away. It filled him with an emotion which he could not understand or analyse. He felt the awe and the delight which a man might feel who watched the beginning of a world. It was tremendous, sensual, passionate ; and yet there was something horrible there, too, something which made him afraid. It was the work of a man who had delved into the hidden depths of nature and had discovered secrets which were beautiful and fearful too. It was the work of a man who knew things which it is unholy for men to know. There was something primeval there and terrible. It was not human. It brought to his mind vague recollections of black magic. It was beautiful and obscene.

“*Mon Dieu*, this is genius.”

The words were wrung from him, and he did not know he had spoken.⁽⁷⁾

(彼は壁の絵を眺めながら、なにか魂のドン底から揺り動かされるようなものを感じた。もちろん彼は、絵については全くの素人だった。だが、それらの絵には、なにか恐ろしいまでの魅力があった。床上から天井まで、壁という壁はことごとく、奇怪きわまる、そして恐ろしく入念な構図でいっぱいになっていた。しかもそれはまったく言語に絶した驚異と神秘だった。

彼は呼吸を呑んだ。自分にもわからない、むしろ分析などできるはずもないある異様な感動で胸いっぱいになってしまったのだ。まさに世界の創造を眼のあたり見たものが感じたであろうような、不思議な畏怖と歓喜とを彼は感じた。すばらしい、官能的な、そして情熱的な絵であった。そのくせそこには、彼を思わずぞっとさせるような、恐ろしい戦慄があった。いわば、自然の隠れた深淵に潜りこみ、豁然としてそこに、美しい、だが同時に、恐ろしい秘密を掴み出した男の作品であった。さらに言えば、それは人間として知ることを許されない、ある神聖な秘密を知ってしまった人間の作品であった。なにか原始的な、そして恐怖に充ちたものがあった。もはや人間のものではなかった。彼はなんとなく漠然と悪魔の呪術とでもいったものを思い出していた。美しい、しかも淫らな美しさだった。

「ああ、これこそ天才だ」

胸の底から絞り出すように呟いた言葉だった。彼自身意識しないで呟いた言葉だった。）

Strickland は最後の一年間は目がみえなかった。しかし、ここではじめて、自分というものをすっかり吐き出し、彼が人生について知り、かつ望見していたいっさいのものを語りつくして心の休息を見出した。この作品の完成こそ彼の一生の総仕上げであり、これまでのプロセスはすべてそのための苦しい準備でしかなかった。その壁には奇怪、世界の創成、エデンの楽園、アダムとイヴ、とにかく、人間の肉体美の賛歌であり、美しく残忍な自然の礼賛であった。しかし、このすばらしい壁画は Ata と医者 of 二人だけの目にふれて、その医者の止めるのも聞き入れず Strickland の遺言を Ata は忠実に守り、焼き払った。

「わたし」はタヒチ島での Strickland の生活状況をロンドンに帰った時に、Strickland 夫人に一部始終を話した。彼女は今では豊かな暮しをしており、夫に対してあれだけ悪口憎悪に満ちていたのだが今では天才の妻であることを誇りにしていた。

(三)

Maugham は *Cakes and Ale* では Thomas Hardy をモデルとして Drifffield を誕生させたが、この *The Moon and Sixpence* においてもフランスの後期印象派の画家 Paul Gauguin (1848-1903) をモデルとした小説として広く知られているところだが、Maugham の巧妙な技法を駆使し、Gauguin について聞いた話を基礎にして、主要な事実だけを使用して、他は Maugham の創作力によって生まれたものである。Paul Gauguin の年譜を見ると明瞭である。

1848年 6月4日

パリのノートル・ダム・ド・ロレット街に生まれる。父は共和主義のジャーナリスト母はサンシモン派社会主義の女流文人フロリーヌ・トリスタンの娘。

1851年 (3才)

ナポレオン三世のクーデター後、父は失職一家はペルーに向う。航行中に父が死亡。母、姉と共に4年間リマに住む。

1859年 (11才)

オルレアンの神学中学校の寄宿生となる。

1865年 (17才)

見習い水夫として、リオ・デ・ジャネイロに初航海。

1866年 (18才)

二等運転士としてチリ号に乗船し世界周航。

1871年 (23才)

ベルタン株式取引所に就職。同僚シュフネッケルの勧めで絵を描き始める。

1873年 (25才)

デンマーク人、メット・ソフィエ・ガースと結婚。株式仲買人として才能を発揮し裕福な生活。この前後から画技を学ぶ。

1874年 (26才)

ピサロの指導をうけ、印象派の画家と知りあう。

1881年 (33才)

第六回印象派展出品作「裸婦習作」をユイスマンスが激賞。セザンヌを知る。

1883年 (35才)

株式取引所をやめ「これからは毎日描く」と画業に専念。ピサロと共に制作。

1884年 (36才)

生活窺迫。一家コペンハーゲンに移る。

1885年 (37才)

妻の実家と軋轢、個展も不評、息子クロヴィスだけを連れてパリに帰る。

1886年 (38才)

ポスター貼りで食費かせぎ。ゴッホを知る。

1887年 (39才)

生活の苦境を脱すべく、友ラヴアルと四月パナマに行き運河工事の人夫として働く。六月マルティニク島に行くが二人とも熱病にかかり十二月に帰国。

1888年 (40才)

アルルでゴッホと共同生活。ゴッホの病的発作で破局。パルに帰る。

1891年 (42才)

作品30点を競売。三月、コペンハーゲンに行き妻子に会う。四月四日出航、六月八日、タヒチ島のパペーテに到着。奥地のマタイエアに落ち着き、タヒチの少女テフラと同棲。

1892年 (44才)

二～三月 パペーテの病院に入院。

1893年 (45才)

経済的困窮と健康悪化に余儀なくフランスに帰る。叔父の遺産を受けパリにアトリエを借りる。混血女アンナと同棲。

1895年 (47才)

二回目のタヒチ島行。西岸のプノアウイア地方に落ち着く。

1896年 (48才)

疼痛と孤独の暗い日々、制作を続ける。

1897年 (49才)

娘アリーヌの死の知らせを受け、深い悲しみと絶望のために自殺を決意。遺言的大作「われわれはどこから来るのか、われわれは何者か、われわれはどこへ行くのか」制作。「ノア・ノア」を「ルヴュ・ブランシュ」誌に発表。

1898年 (49才)

二月、自殺を計るが未遂に終る。

四月、パペーテの公共土木事業員となる。

1899年 (50才)

一月、事務員の職を辞める。植民地役人との間の紛争。植民政策を批判、原住民の擁護につとめる。

1901年 (52才)

タヒチ島を去ってマルキーズ諸島のドミニカ島に移る。

1903年 (54才)

官憲やカトリック司教の権力と争い、不当な原住民圧迫に抗議したことがもとで、禁錮三ヶ月と罰金の判決を受ける。控訴のためタヒチに行こうとするが資金がなく果せない。五月八日、心臓発作のため死去。

パリのヴォラール画廊でゴーギャン展、サロン・ドートンヌで追悼展。

つまり Strickland と Gauguin の生涯を比較してみると差異が多い。「ゴーギャンの世界」(新潮社)の著者、福永武彦氏によると、*The Moon and Sixpence* は完全な創作で Gauguin と大して関係はない。小説としてはうまいが、Gauguin にとっては迷惑な話であろう。と断言しているのは興味ある見識であろう。

Gauguin の才能についても福永武彦氏によると、内的要因としてとりあげているのは、画家の祖母からの素質の隔世遺伝、ルイ・ナポレオンの弾圧を逃れて、ペルーの母の実家で過した幼年時代の生活体験、オルレ안의神学中学校を終えて、見習水夫としてル・アーヴル港よりルツィターノ号に乗船リオ・デ・ジャネイロへの航海体験である。

しかし Maugham は勤勉な中流階級の生活を支えていた Strickland が突

然、仕事と妻子を捨てて絵に専念するという設定を主人公におき、さらに天才に仕立てた点で真の天才 Gauguin にとって迷惑な話ということになるであろう。

Maugham はかつて芸術家たちの交りの中で Gauguin の生き方に Mangham 流の感銘を受けたことは確かで、人の一生を犠牲に芸術をきわめるというロマンチックであり、英雄的であり、芸術至上主義的である。その意味で、生活に於ても信念に於ても、Paul Gauguin は恐らく最後のロマン派だったと「ゴーギャンの世界」の中で福永武彦氏は述べている。

Maugham は自分を語り手として主人公 Strickland の生き方をよりあざやかにするために強い意志で人生を生きた Captain Brunot と Abraham の二人を登場させている。

Abraham は聖トマス病院付属医学校に奨学資金をもらって入学し五年間の課程であらゆる褒賞を獲得した秀才で前途洋々たる未来を目前にして、聖トマス病院の新しい地位につく前に休暇をとり地中海に船旅をし、アレキサンドリアでドックに入った時、甲板に立って白白と陽に光る町を眺めていた時に彼の心に一つの変化が起った。それは青天の霹靂、いや啓示を受け、ここアレキサンドリアこそ、自分の余生を送るべき場所だと決心し下船した。検疫医として貧しい生活を送るが自分の意志に対しては正直に生きたのである。

“But if I weren't personally concerned I should be sorry at the waste. It seems a rotten thing that a man should make such a hash of life.”

I wondered if Abraham really had made a hash of life. Is to do what you most want, to live under the conditions that please you, in peace with yourself, to make a hash of life ; and is it success to be an eminent surgeon with ten thousand a year and a beautiful wife? I suppose it depends on what meaning you attach to life, the claim which you acknowledge to society, and the claim of the individual. But again I held my tongue, for who am I to argue with a knight?⁽⁸⁾

（「だが、もしこれがだね、僕自身に関係したことでさえなけりゃ、やっぱり馬鹿なことをしたもんだと言いたいねえ。自分の一生をこんなに台なしにしてしまうなんて意味ないよ、君。」

だが果してエイブラハムは一生を台なしにしてしまったろうか。本当に自分のしたいことをするという、自分自身に満足し、自分でも一番幸福だと思ふ生活をおくること、それが果たして、一生を台なしにすることだろうか？それとも一万ポンドの年収と美人の細君とを持ち、一流の外科医になること、それが成功なのだろうか？思うにそれは彼が果たして人生の意味をなんと考えるか、あるいはまた社会といい、個人というものの要求をどう考えるか、それらによって決まるのではあるまいか？だが、もちろん今度も僕は黙っていた。なにしろ、相手は勲爵士だ、僕など議論に出る幕でないと思ったからである。）

この作品に Maugham は Abraham の生き方を示すことによって主人公 Strickland の生き方に大いなる拍手を送って、自分にできなかったことに対するあこがれを表現しているということになるのではないだろうか。

(四)

Strickland はこの作品の中で三人の女性と関わってきている、つまり、Strickland 夫人、Blanche Stroeve、それにタヒチ島での土人の娘 Ata である。

Strickland 夫人は常識的社会意識が豊かで因襲にこりかたまつた女性。知性にもあふれ、魅力に富んでいるが自由を欲し、束縛から解放されたい男性には有難くない存在で、常識的社会に個性を埋没させられる。

Blanche Stroeve は性的魅力をもった官能的で感情的で、彼女についての Robert L. Calder の主張は興味深い。

She is sensual and emotional, and this often leads to tragedy. Although Blanche is the catalyst which brings about a flowering of Strickland's genius, she is a constant threat to his art.

In his treatment of sex and the artist, Maugham adheres to the widespread tradition in artist novels that a woman can inhibit and destroy the artist. Throughout Strickland's development as a painter, sexual passion and love represent a form of bondage from which, for the sake of his painting, he must remain free. For him, life is not long enough for both love and art :⁽⁹⁾

（彼女は官能的で感情的そして、これがしばしば悲劇をひきおこすことになる。ストリックランドの天才に開花をもたらす触媒にはなるけど、ブレーションシュは彼の芸術にとって、いつも脅威的存在である。

性と芸術家のあつかいでモームがいつもとる方法は、女姓が芸術家を抑制し破壊するという芸術家小説でひろくつかわれている伝統である。画家としてのストリックランドの成長をとおして、性的情熱と愛情は一種の絆をあらわし、絵のために、彼はそれから解放されていなければならない。彼にとって、人生は愛情と芸術に二股をかけるほどながいものではない。)

BlancheはStricklandとの深い関係にとどまらず自分の支配下におこうとするがStricklandにとっては自由と芸術の探求に危機感をいだく。

“When a woman loves you she's not satisfied until she possesses your soul. Because she's weak, she has a rage for domination, and nothing less will satisfy her. She has a small mind, and she resents the abstract which she is unable to grasp. She is occupied with material things, and she is jealous of the ideal. The soul of man wanders through the uttermost regions of the universe, and she seeks to imprison it in the circle of her account-book. Do you remember my wife? I saw Blanche little by little trying all her tricks. With infinite patience she prepared to snare me and bind me. She wanted to bring me down to her level ; she cared nothing for me, she only wanted me to be hers. She was

willing to do everything in the world for me except the one thing I wanted : to leave me alone.”⁽¹⁰⁾

(たとえば女が恋をする。やつらは相手の魂を手に入れてしまわないかぎり、満足しないのだ。やつらは弱い。だが弱いからこそ、いっそう気違いのように支配者になりたがる。そうならなければ承知できないのだ。小っぼけな心の持ち主だもんで、自分にはわからない抽象的なものは、いっさい嫌悪する。感覚的なものばかりに心を奪われて、観念、理想といえば頭から憎んでかかる。男の魂というものは、この宇宙のどんな限りない涯までも天翔けて行く。それをやつらは、なんとかして家計簿の中に閉じ込めてしまおうというのだ。君は俺の家内を憶えているかい？俺はブランシュのやつが、そろそろあらゆる小細工をやりだしたのに気がついた。それは実に驚くほどの忍耐をもって、この俺に罫をかけて、縛り上げてしまおうとした。つまり自分と同じレヴェルにまで引き下ろそうというのさ。俺のことなんぞ、これっばかりも思っただけでやしない。

ただ俺をしっかりと自分の物にしようという、それだけなんだ。なるほど俺のためには、どんなことでも喜んでしてくれたらう。だが、かんじんの俺のほうでして欲しいことだけは断じてしてくれない。つまり、俺をソツと放っというてくれることなんだ」)

最後の女性、土人の娘Ataこそ、この小説の中でMaughamは芸術家、Stricklandにとって最も理想とする女性としている。

“I asked him if he was happy with Ata.

“‘She leaves me alone,’ he said. ‘She cooks my food and looks after her babies. She does what I tell her. She gives me what I want from a woman.’”⁽¹¹⁾

(「君はアタと二人で幸福なんだね？と私はきいてみた。)

「あの女は私をそっとしておいてくれるんだよ。食事をこさえてくれ、それから子供の世話をしてくれる。私の言うとおりでなんでもしてくれる。

つまり私が女から求めているものだけはちゃんとあの女はしてくれるんだ。)

AtaはGauguinのタヒチ島での原地妻テフラをモデルにしてMaughamは登場させているのである。GauguinがテフラについてGauguin自身がかいている「ノア・ノア」の中で次のように述べているがStricklandのAtaに対する思いと大変似ていることはすぐ判明する。

私はまた仕事を始めた。幸福が、私の小屋いっぱいにあふれていた。幸福は太陽と共に、太陽のように輝いて現われた。テフラの金色の顔は、小屋の中や周囲の景物を、喜びと輝きで満たしていた。しかも私たち二人は、お互いに実に単純だった。朝になって、まるで、天国でアダムとイヴが行なったように、二人一緒に、近くの川に水を浴びにゆくのは、どんなにたのしかったことか。

タヒチの天国nave nave fenua (心よき土地) しかもこの天国のイヴは、だんだん素直に愛らしくなってきた。私は、彼女から立ちのぼる香を嗅ぐ。ノアノア！彼女はちょうど良い時に私の生活へはいってきたのだ。もっと早かったら、おそらく私は彼女を理解しなかったろうし、またもっと遅くだったら、それはあまりに遅すぎたにちがいない。今、私は、彼女を愛すると同時に理解している。そして、彼女のお蔭で、つい今まで手にとらえ得なかったさまざまな神秘的な境にまでも入り込んでいった。しかし時には私の知識では判断もできず、私の記憶では始末のできないことがあった。しかし、テフラのいうことはすべてみな感覚で理解した。後になって私が彼女の書きとめておいた言葉で思い出すのは私の感覚と感情によってのみであった。彼女はその民族を完全に理解する点で他のいかなる方法よりも確実に、日々の生活の教えで私を導いてくれた。私は、もう日も時間も意識せず、善悪も考えなくなっていた。幸福はその観念をなくしてしまった時にはもうわからなくなってしまうものだ。そして、すべてが美しい時、すべてが美しい時、すべては善だ。

そして、テフラは私が仕事をしたり夢想したりしている時には少しも私の邪魔をしなかった。そんな時には、彼女は本能的に黙っている。そして声をあげても私の邪魔にならない時をよく知っている。その時私たちは、ヨーロッパのこと、「キリスト」や神々の事などをお互に話し合った。私は彼女を教育し、また彼女は私を教育してくれた。⁽¹²⁾

現実にはGauguinはタヒチ島に二度行っているのである。最初の滞在は1892年から1893年までの間で、その時にテフラと共に暮らし、二年後の1895年に再度、タヒチに行くが、テフラはすでに他の男の妻になっており、Gauguinはパフラという別の女性と生活をともにすることになる。ところが、この小説の主人公は一度タヒチに来て以来、故国のイギリスに帰国せず、Ataと生涯を共にシタヒチで死んでいくのである。

Maughamはこの作品の中でAtaを美化し、Maughamのお気に入り創作し、Strickland夫人やBlancheとのちがいを明瞭にしたいという願望がここに現われているといえよう。

Maughamはこの小説の11年後に*Cakes and Ale*をかくのだがその中に登場する主人公の二度目の妻Drifffield夫人がStrickland夫人のような存在で、また、多浮な女RosieはBlancheであり、Maughamが好んで創作する女性である。

(五)

この小説を読んで現実的存在を与えるばかりでなく、我々の身のまわりに存在するという親近感すら感じさせるのがDirk Stroeveであろう。Blancheが口惜しがる程、善人で読者にいらいらさせる焦燥感をおこさせる彼はこの小説中の物語の面白い展開に重要な存在である。特にBlancheをモデルにした裸体画に嫉妬を感じて、ナイフでその絵を突きさしめちゃくちゃにしておもうと思って手を上げておろせなかった場面は時代劇を思わせるものでStricklandの天分に敗北し、画業から身を引き、故国オランダに帰国するという悲劇に終る。筆者は彼に対して同情を禁じえないのだが大多数の読者にはあまりのお人好しに共感をもちえないのが妥当なところであろう。

善人Dirk Stroeveを敗北させたStricklandを毛嫌いしていた妻のBlancheが

何故Stricklandに惹かれていったのか。恐らくDirkにないStricklandの野蛮な魅力にひかれ、又Stricklandも自分に嫌悪感を示す人間に愛想のよさを示す一面があり、相乗作用の結晶として二人結だれたのであろう。

この小説の中でStricklandは自己中心主義であり、友人の親切を仇で返し良心の呵責を全く感じない私情の権化として徹底的に描写されると同時にタヒチで絵の創作に熱烈な力を発揮してAtaに自分の死後、灰にせよという遺言するが、彼にとって作品そのものには興味はなく、絵の創作の過程の一瞬一瞬に生きがいを見つけている。これこそ、Maughamの求めている芸術至上主義であらう。

MaughamはStricklandに芸術家気質らしき個性を与えているし、これがこの小説の魅力である。その芸術的気質について「サマーセット・モームの小説群」の著者、越川正三氏は次のように述べている。

Stricklandはわがままで無精な男だ。しかし、それは平凡な生活者が無精や利己主義のゆえにみせるところのわがまとは根本的にちがう。平凡な生活者が自分だけの平穩無事を守ろうとして陥る利己主義とは次元の異なるものである。芸術家であるStricklandは周囲の平穩主義者たちを意に介さないと同時に、自分自身が平穩主義に傾くことをもストイックに回避している。彼は周囲の人たちの幸福を省みないとおなじように、自分の幸福をも省みない。彼は幸福というものを芸術に捧げたのである。⁽¹³⁾

(六)

Maughamが文学に志し、幾多の人たちの交りの中で芸術家に大きな関心を抱いていたことは確かで、芸術家は自由になれる存在として魅力的であると*The Summing Up*で述べている。

Most people live haphazard lives subject to the varying winds of fortune. Many are forced by the situation in which they were born and the necessity of earning a living to keep to a straight and narrow road in which there is no possibility of turning to the right or to the left. Upon these the pattern is imposed. Life itself has forced it on them.

There is no reason why such a pattern should not be as complete as that which anyone has tried self-consciously to make. But the artist is in a privileged position. I use the word artist, not meaning to attach any measure of value to what he produces, but merely to signify someone who is occupied with the arts. I wish I could find a better word. Creator is pretentious and seems to make a claim to originality that can seldom be justified. Craftsman is not enough. A carpenter is a craftsman, and though he may be in the narrower sense an artist, he has not as a rule the freedom of action which the most incompetent scribbler, the poorest dauber, possesses. The artist can within certain limits make what he likes of his life. In other callings, in medicine for instance or the law, you are free to choose whether you will adopt them or not, but having chosen, you are free no longer. You are bound by the rules of your profession ; a standard of conduct is imposed upon you. The pattern is predetermined. It is only the artist, and maybe the criminal, who can make his own.⁽¹⁴⁾

(多くの人は、運命の風のまにまに、行き当たりばったりの生活を送っている。また生れた条件や、右へも左へも曲る可能性のない、真直ぐな、狭い一本道を歩きつづけるための、生活の代を稼ぐ必要とによって強制されている。こうしたものの上に模様が捺されるのだ。生活そのものが彼らにそれを強制するのである。そうした模様が意識的につくろうと試みて来た人の模様ほど、完全にならないという理由はない。しかし芸術家は特別の地位にある。ここで、わたしは芸術家という言葉を用いるが、それはその作品になんらかの価値を認めるというのではなく、単に芸術に恵心している人を意味するだけのことである。なかなかいい言葉がみつからない。作家というのではいかにも空々しいし、ほとんど承認できない独創性でも持っているように聞える。匠人でも充分ではない。大工は匠人である。そして狭義には芸術家でもあるかもしれないがいかにも無能な三文文士、ヘボ

絵描きでも持っている、行動の自由を持っていないのが普通である。芸術家は一定の範囲内では、自分の生活を好きなままにすることができる。ほかの職業、たとえば医者とか弁護士では、その職業に就くか就かないか、選択することは自由である。しかし、一旦選んでしまえばもう自由ではない。自分の職業の掟にしばられる。行為の標準が課せられる。模様があらかじめ決定されているのだ。自分勝手な模様をつくることができるのは、芸術家及びおそらく犯罪者のみである。)

Maughamは*Of Human Bondage*を世に出した時はあまり注目されなかったが*The Moon and Sixpence*は世界大戦でつかれ、戦後の大衆の求めていたもの、つまり、逃避を与えることになり、当時の大衆の気分に応ずるという好運に恵まれた。

芸術を通して逃避という一形式をとり、この小説はほとんどが写実主義的な描写にもかかわらず、芸術的気質についてのMaugham自身の考えはロマンティックなものであった。彼の自叙伝的小説*Of Human Bondage*の中で金は第六感のようなものであり、それがなければ他の感覚を完全に作用できないという経済観念を現実にはもちながら、Stricklandという主人公の芸術家を創造して、生れつき口がうまくきけず、無口なのでMaughamは絵を媒体として表現を求め、そのために芸術家を創造し、生涯をあらゆる犠牲を払っても意志的に生きたいというロマンを求める願望をこの小説の中に全力で告白している。

(七)

Maughamは英国人であるがフランス生れ、言語も最初にフランス語を話し、それから、英語という普通の人ではあまり経験しないことをし、英国で教育を受け、さらに、ドイツの大学でドイツ語を学び、5ヶ国語の知識をもち、古典を学び、親譲りの旅行好きで欧州、アフリカ、印度、マレー、南太平洋諸島等世界の各地を旅し人間生活の諸々を観察し英国以外の素材を使用して創作活動をしているのだがこの*The Moon and Sixpence*もその一篇でタヒチ島の旅はMaughamに創作意欲をかきたてたことは論をまたない。

Maughamは極東の旅に出る前までは主に自分自身の経験を小説、劇等の題材にしていた。*Of Human Bondage*や*Liza of Lambeth*等にもられるようにイギリスのパブリックスクールでの生活、ドイツのハイデルベルヒ大学での生活、パリでの芸術家たちの交りの生活、またラムベスの貧民窟での生活等。しかし、彼が東洋を旅し、*Summing Up*の53章に述べているように、自分と違った流儀で人生を学び、そして異った結論に到着し、異った基盤の上で人生を追っている人たちとの出会いに新鮮さを求めて、東洋にしか自分達の平和と真の住家と見出しえない英国人を描いている。この小説の主人公Charles Stricklandこそ、まさにその人であった。Stricklandがはじめてタヒチ島を見た時に熱狂し、この島こそ、自分が求めていた場所で、以前に住んでいたことがあると断言出来そうだと叫んでいる。Maugham自身が故国でもないのにその中に心の平和と幸福を感じた投影がこの小説の中にはっきりと見ることができる。

Maughamは「わたし」という語り手となってこのStricklandを残酷、冷酷、利己的、肉欲的な背徳漢として道徳的義憤を感じ、けもののような人間だと悪口しながらも、美に対する探求に打ちこむ苦闘の姿、特に癪におかされ、目もみえない状態でタヒチの山奥の小屋の壁に絵を完成させた芸術意欲に神なるもの、より崇高なる純粋な追求に感動をおぼえる。結局、MaughamはStricklandに対して憐憫の情をこえて称賛さえしているように思える。Maughamは若い時から粗暴、軽薄、皮肉、有能、浅薄と言われてきたが心の底にはロマンを求める心が存在すること認めざるを得ないのである。何故ならば、Maughamは芸術における天才に対して両手をあげて屈服し、芸術を道徳に先行させているのである。

「サマセット・モーム研究」(英宝社)の中で、竹内正夫氏は作者MaughamとStricklandとを分離しては考えにくいと言っている。⁽¹⁵⁾

Maughamは医学を修め、実習生として一年間、患者に接している。その体験を*Liza of Lambeth*として世に処女作として出し、それが好評であったことに力を得て医者をやめ、作家になった。そして10年間は作家修業に苦勞している。

一方、Stricklandは株式仲買人でひそかに一年程、夜学で絵の勉強し、株屋を

やめて画業に志したのである。Maughamは23才の独身者で、Stricklandは40才の妻子持ちであるという違いはあるが前途洋々たる医者、有能な会社員という有望な職業を棄てて魂の自由なる世界、永遠の生命を求めて芸術の茨の道へ進路を変えた。

凡人は「月」よりも「六ペンス」を求めてさまよっているが「月」を求めた主人公Stricklandが小市民的配慮から一切をかなぐり棄てて雄々しく密林に入っていく姿はまさに英雄的行為に似ている。この勇氣こそこの小説が多くの読者をひきつけているのではないだろうか。何故なら「六ペンス」を求める凡人には入れぬ世界だからであろう。

BIBLIOGRAPHY

- Maugham, W. S. ; The Moon and Sixpence Modern Library 1919
 Brophy John ; Somerset Maugham, Supplement to British Book News
 Maugham, W. S. ; The Summing Up Heinemann 1938
 Calder, R. L. ; W. S. Maugham and The Quest for Freedom, New York, Doubleday 1972
 Maugham, Robin ; Somerset and All the Maughams, Greenwood Press Publishers
 Janas Klaus W. ; The World of Somerset Maugham, Greenwood Press Publishers
 Curtis Anthony ; Somerset Maugham, Macmillan Publishing Co, Inc. New York
 Maugham Ted ; Maugham A Biography, Simon and Schuster New York
 「サマセット・モームの全小説」 越川正三著 南雲堂
 「モームの世界」 相良次郎著 評論社
 「モームの研究」 中野好夫編 英宝社
 「モーム」 上田勤著 研究社
 「モームの二つの世界」 山川鴻三著 京都あぼろん社
 「サマセット・モーム小説群」 越川正三著 関西大学出版部
 講座・イギリス文学作品論 「サマセット・モーム」 高見幸郎著訳 英潮社
 20世紀英米文学案内19 「サマセット・モーム」 朱牟田夏雄編 研究社
 「ゴーギャンの世界」 福永武彦著 新潮社
 「ノア・ノア」 ポール・ゴーギャン著 前川堅市訳 岩波文庫版
 「ゴーガン生涯」 アンリ・ペリュショ著 窪田般彌訳 紀伊国屋書店
 「タヒチのゴーギャン」 B・ダニエルソン著 中村三郎訳 美術公論社
 「新潮社美術文庫」 日本オートセンター編 新潮社
 「現代美術」14巻 松谷彊 みすず書房

NOTE

- (1) The Moon and Sixpence (Modern Library 1919) p. 141
(Translation : Yoshio Nakano)
 - (2) op. cit, p. 144
 - (3) op. cit, p. 145
 - (4) op. cit, p. 211
 - (5) op. cit, pp. 299-300
 - (6) op. cit, p. 316
 - (7) op. cit, p. 325
 - (8) op. cit, pp. 286-287
 - (9) W. Somerset Maugham and the Quest for Freedom (Heinemann) p. 149
(Translation : Teizi Kitagawa)
 - (10) The Moon and Sixpence (Modern Library) p. 226
 - (11) op. cit, p. 302
 - (12) 「ノア・ノア」(ゴーガン) pp. 56-57
 - (13) 「サマセット・モーム小説群」(関西大学出版部) p. 266
 - (14) The Summing Up (Heinemann) pp. 48-49
(Translation : Yoshizo Nakamura)
 - (15) 「サマセット・モーム」(英宝社) pp. 245-246
- ※ゴーガンの年譜については「現代美術」「新潮社美術文庫」「ゴーガンの生涯」「タヒチのゴーガン」を参照して作成。